■書　　評■

関根良雄『知っておきたい　アフリカの歴史』（マイライフ社，1986年）

松　本　　敏

世界史における近代を再考しようとするとき有効な研究対象となるのは，西欧諸国によって犠牲にされた土地であり，そこに住む人々の暮らしであろう。インドをはじめとするアジアや戦火の絶えない中南米もさることながら，人類の発祥の地として最も長い歴史（文字に書かれなかったものも歴史ということが許されるならばだが）を持ち，日本の８２倍という広大な面積を持つアフリカこそ，我々の真剣な考慮の対象たるべきである。アフリカの飢饉問題は世界の良心的な人々の胸を痛ませ続けてきたし，２０世紀の芸術（とくに音楽）はアフリカ抜きでは考えられないというように，アフリカは，現在さまざまな観点でさまざまな人々の注目を集めている。

ところが，教育の場においてアフリカのことがどれだけ取り上げられてきたかと問うてみると，現在の飢饉問題を総合的に理解するために必要な知識さえ十分に教えられているかどうか疑問であるというのが現状であろう。しかも，その責任を第一に負わなければならないのが社会科であることは言をまたない。

著者自身次のように述懐されている。「授業中よく『現代をよりよく理解するため歴史を勉強するのだ』とか『現代の人類を映し出し，未来の人類の生き方に示唆を与えてくれるのが歴史である』などと偉そうなことを言っていたが，私自身それほど歴史に精通していたわけでなく，中でもアフリカについては，まったくと言ってよいほど知識を持ち合わせていなかった。」（「あとがき」）もちろん，多分に謙遜を含んでのことではある。また，「アフリカ史，特にサハラ砂漠以南の歴史（現代を除く）については，高校の世界史ではあまりあつかっていないこともあって一般には『文化果つる所』という言葉に代表される暗いアフリカ観しかもち合わせていないのが実状である」（「はじめに」）とも述べておられる。

著者関根良雄氏は，栃木県の高等学校で教鞭を取ってこられた方で，栃木県高等学校世界史研究会で中心的な役割を担って来られた。１９８４年度に筑波大学に一年間内地留学され，梶哲夫先生，吉田寅先生の指導の下に，本書のもとになったアフリカ史の研究をなされた。内地留学から栃木県に戻られた後は，県教育委員会事務局社会教育課に勤務されているが，その激務の合間を縫って纒められたのが本書である。

本書の第一の特徴は，近年多数出されてきたアフリカに関する書物がほとんど専門書であるの

に対して「高校生でも読めて，"現代のアフリカを考えられる本"」としてまとめられたものであるという点である。この点ではほとんど唯一の業績といっていいのではないだろうか。一般に，高校の教師が教材研究をするには，概説書ではもの足りず，さりとて膨大な専門書の山を相手にする余裕もないというのが実態である。その意味で，この種の仕事は，今後多様に試みられる必要がある。

第二の特徴として，構成の妙を上げたいと思う。本書は，人類の誕生から伝統的社会の形成，奴隷貿易期，植民地支配，戦後の再生と，一応通史的な順序を踏みながら，先史・古代を扱った第Ⅰ部「人と文化」を「風土と生活文化」の視点で，奴隷貿易期から第二次世界大戦までを扱った第Ⅱ部「アフリカの変貌」を「交易と文化交流」「植民地経済と民族主義」という視点で，そして戦後のアフリカを描いた第Ⅲ部「アフリカの再生」を「政治的独立と経済的自立」の視点でそれぞれうまくまとめられている。そのことが，私のような素人にとってはほとんど未知の地名や民族名が２５０ページにわたって連ねられることになるこの大部の書物を，冗長感なく読み通させてくれるのに大いに役だっている。しかも，多数の地図や表が適切に配置されて理解を助けてくれる。また，挿絵や随所に挿入された「ひとくちメモ」がアフリカの自然・文化・習俗を端的に知らせるのに貢献している。

本書は，高校で世界史を教える教師の教材研究用としてはもちろん，今日のアフリカの政治・文化・社会に関心をもつ者にとって必須の知識を与えてくれるという点で，より多くの人にも進めたい。また，高校社会科の教材研究のあり方を考える人のためにも，有益な一里塚となるであろう。本学会の趣旨からいっても，会員の間から，世界史はもとより他の分野においても，このような成果が多様に出されることが期待される。

本書の純益は毎日新聞社会事業団を通じて「アフリカ飢饉・難民救援基金」に寄託されると明記してある。このことも，関根氏の研究・教育の態度の一端を示すものであろう。

なお，本書を求めたい方は，下記関根氏あてに直接申し込まれると便利である。

〒328　栃木市今泉町1-14-15 関根良雄（TEL 0282-27-0517）

（まつもとさとし　筑波大学大学院）